

令和5年度の生きものの確認結果

1. 令和5年度の生きものの現地確認の概要

令和5年度に実施した区内の生きものの現地確認は表 1.1 に示す日時と場所で開催し、春夏・秋冬の2回で計61種の生きものが確認されました（表 1.2）。

表 1.1 令和5年度の生きものの現地確認の概要

季節	実施日時	天気	場所
春夏	2023年7月25日（火） 09:00～12:00	晴	小石川植物園
秋冬	2024年1月22日（月） 09:30～12:00	晴時々曇	根津神社 東大本郷キャンパス 東大弥生キャンパス

表 1.2 令和5年度の生きものの現地確認結果

区分	春夏		秋冬		年間		計
	在来種	外来種・不明	在来種	外来種・不明	在来種	外来種・不明	
哺乳類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
鳥類	8種	1種	16種	2種	19種	2種	21種
爬虫類	1種	1種	0種	1種	1種	1種	2種
両生類	0種	1種	0種	0種	0種	1種	1種
魚類	0種	2種	0種	1種	0種	2種	2種
陸産貝類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
淡水産貝類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
昆虫類	15種	2種	1種	0種	16種	2種	18種
クモ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
ムカデ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
ワラジムシ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
エビ・カニ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
ミミズ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
ヒル類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
ウズムシ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
種子植物類	3種	3種	3種	8種	6種	11種	17種
シダ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
コケ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
菌類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
計	27種	10種	20種	12種	42種	19種	61種

2. 令和5年度の生きものの現地確認状況

2.1 夏の現地確認結果

春夏に確認された生きものの写真と概説を以下に整理しました。

(1) 鳥類

	コゲラ
	東京大学大学院理学系研究科 附属植物園（小石川植物園） 2023年7月25日
	『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.42
<コメント> 小型のキツツキで、夏に見られるのは珍しいです。冬は樹林地で割とよく見かけます。	

	ヤマガラ
	東京大学大学院理学系研究科 附属植物園（小石川植物園） 2023年7月25日 重要種（都 VU）
	『文の京生きもの図鑑』の掲載 (P.144)
<コメント> どちらかという山間の樹林地でよく見る小鳥です。学習能力が高いため芸を仕込むことができ、過去に飼育されてきた歴史があります。	



シジュウカラ

東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.44

<コメント>

樹林地でよく見る小鳥ですが、
都会の環境に適応してきた鳥で
す。写真の個体は色が薄いため
幼鳥と思われます。



メジロ

東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.47

<コメント>

樹林地でよく見る小鳥ですが、
都会の環境に適応してきた鳥で
す。体は黄緑色で、目の周りが
白いのが特徴です。



オオタカの巣

東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.40

<コメント>

一時は絶滅が心配されていた希
少猛禽類の一種です。最近では
都会の環境にも適応した個体
が見られるようになりました。

(2) 爬虫類



アカミミガメ
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）
2023年7月25日
外来種（条件付特定外来生物）
『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.141、142

<コメント>
通称ミドリガメが成長した姿です。池の土手を崩したり、水生植物を食い荒らしたりといった実害をもたらします。



ニホンカナヘビ
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）
2023年7月25日
重要種（都 VU）
『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.55

<コメント>
トカゲ（ヒガシニホントカゲ）に似ていますが、カナヘビは表面がザラザラ（トカゲは光沢がありツルツル）で、尻尾が長い特徴があります。


(3) 両生類



ウシガエル
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）
2023年7月25日
外来種（特定外来生物）
『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.141

<コメント>
体長 20cm 近くにもなる大型のカエルです。ほぼ全国に移入しており、在来種の捕食や競合のおそれがあります。


(4) 魚類


	<p>カダヤシ 東京大学大学院理学系研究科 附属植物園（小石川植物園） 2023年7月25日 外来種（特定外来生物）</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.</p>
	<p><コメント> メダカに似た小型の魚で、戦後にボウフラ対策で移入されました。在来のメダカとの競合が懸念されます。</p>


(5) 昆虫類

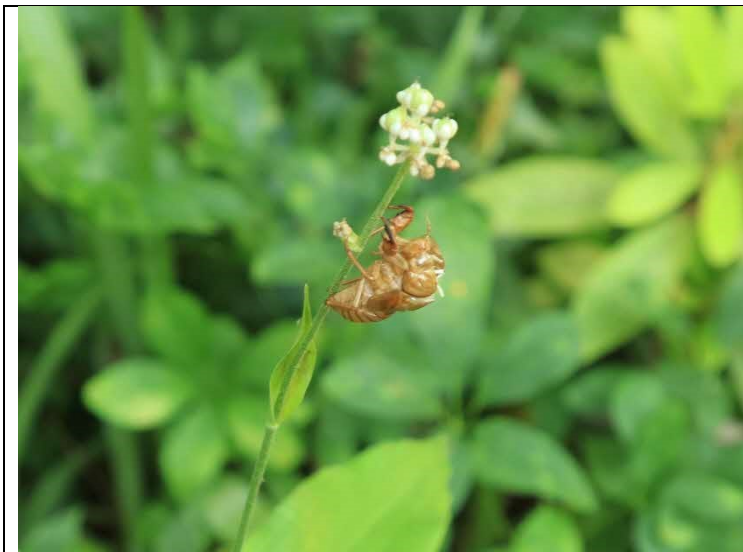
	<p>シオカラトンボ 東京大学大学院理学系研究科 附属植物園（小石川植物園） 2023年7月25日</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 (P.146)</p>
	<p><コメント> 写真の個体はオスで、シオカラの由来となる水色の体をしていますが、メスは茶色の体をしています。</p>

	<p>オオシオカラトンボ 東京大学大学院理学系研究科 附属植物園（小石川植物園） 2023年7月25日</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.62</p>
	<p><コメント> シオカラトンボよりも立派な感じのするトンボです。写真の個体はオスで、メスはくすんだ黄色の体をしています。</p>

	<p>チョウトンボ 東京大学大学院理学系研究科 附属植物園（小石川植物園） 2023年7月25日 重要種（都 NT）</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 なし</p>
	<p><コメント> 光沢のある緑青色の幅広い翅を 持ったトンボで、チョウのよう にヒラヒラ飛びます。植生が豊 かな湿地や池沼などで見られる トンボです。</p>

	<p>ショウリョウバッタ 東京大学大学院理学系研究科 附属植物園（小石川植物園） 2023年7月25日</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 なし</p>
	<p><コメント> 大型のバッタで、お盆の精霊祭 の頃によく見られることからそ の名が付いたと言われています。 オンブバッタとは異なる種 で、より厳つい見た目をしてい ます。</p>

	<p>アブラゼミ 東京大学大学院理学系研究科 附属植物園（小石川植物園） 2023年7月25日</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.65</p>
	<p><コメント> 最も馴染のなるセミの一つで す。夜中でも鳴いていることが あります。</p>



アブラゼミ（抜け殻）
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

ミンミンゼミの抜け殻と比べて、触角が太く目立つのが特徴です。



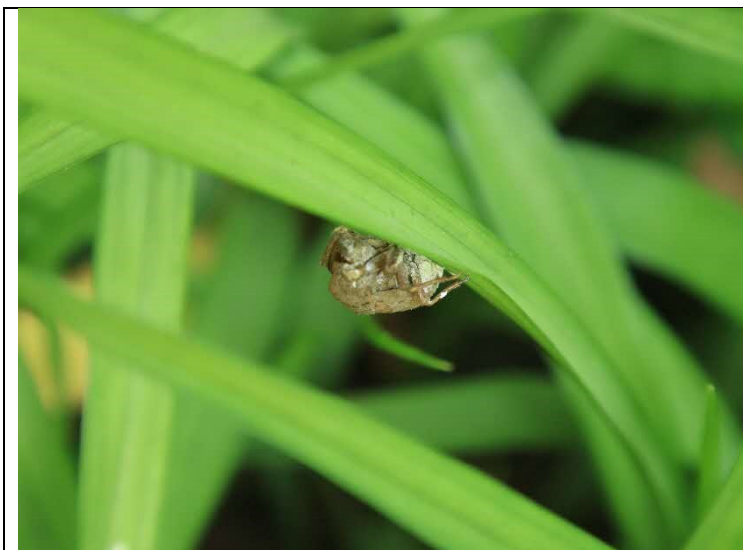
ミンミンゼミ（抜け殻）
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

アブラゼミの抜け殻に似ていますが、触角が細く比較的目立ちにくいのが特徴です。



ニイニイゼミ（抜け殻）
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

小型のセミで、抜け殻も小さいです。抜け殻にはたいてい泥が付いています。



キマダラカメムシ
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

台湾や東南アジアが原産と考えられているカメムシで、近年急速に分布を拡大しています。写真の個体は老齢幼虫です。



ムラサキシジミ

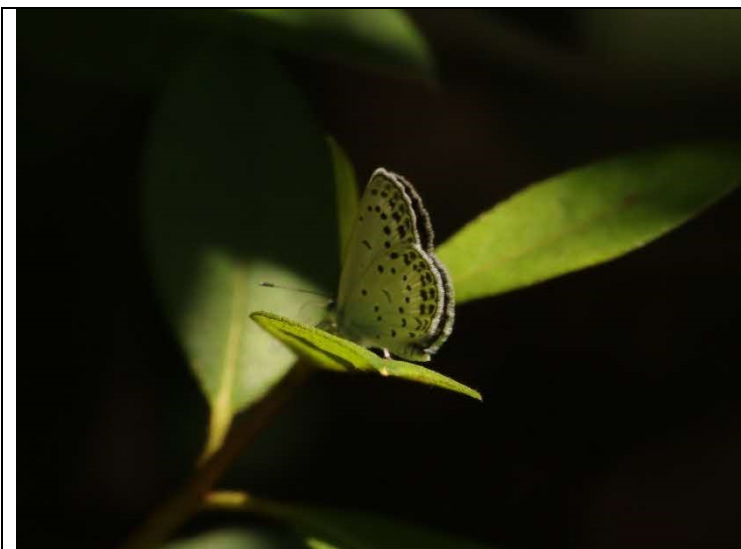
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

翅の裏側は茶色ですが、表側は青紫色をしています。幼虫はブナ科広葉樹の葉を食べて育ちます。



ヤマトシジミ

東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

都内で最もよく見かけるシジミチョウです。幼虫はカタバミの葉を食べて育ちます。



ツマグロヒョウモン
 東京大学大学院理学系研究科
 附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
 P.69

<コメント>

メスの前翅先端部に黒色と白色の帯模様を持つのが特徴です。写真の個体はオスで、裏翅しか見えていません。



アカボシゴマダラ
 東京大学大学院理学系研究科
 附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

外来種（特定外来生物）

『文の京生きもの図鑑』の掲載
 P.141

<コメント>

大型のチョウで、春と夏で模様が違います。写真の個体は夏型ですが、春型では赤い斑紋がなく、黒味が少なく白っぽく見えます。



カラスヨトウ
 東京大学大学院理学系研究科
 附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
 なし

<コメント>

カラスのような黒い色をしたヤガの一種です。



ホソヒラタアブ
 東京大学大学院理学系研究科
 附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
 なし

<コメント>

都会やその近郊の里山などでよく見られるハナアブの一種です。成虫は花の蜜を吸い、幼虫はアブラムシなどを食べて育ちます。



カナブン

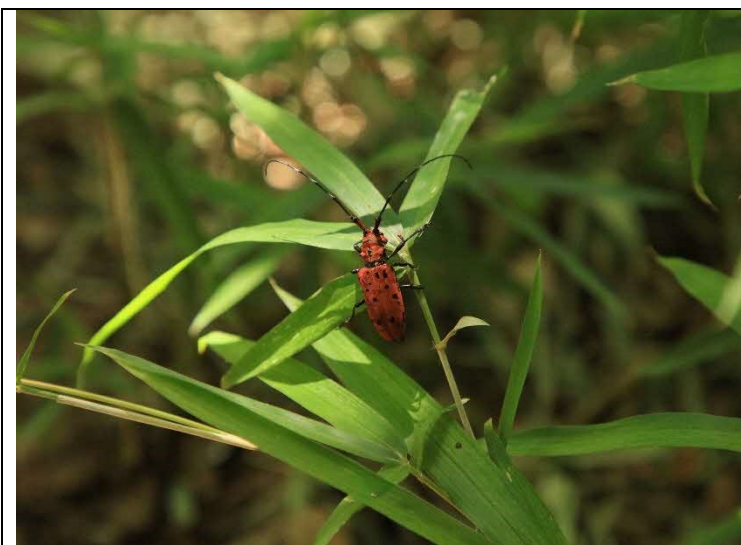
東京大学大学院理学系研究科
 附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
 なし

<コメント>

広葉樹の樹液によく群がるコガネムシの一種です。最もポピュラーな昆虫の一つですが、最近まで幼虫の生態についてよくわかっていませんでした。



ホシベニカミキリ

東京大学大学院理学系研究科
 附属植物園（小石川植物園）

2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
 なし

<コメント>

どちらかというと温暖な所で見られるカミキリムシです。クス科植物を食べます。

(6) 維管束植物類



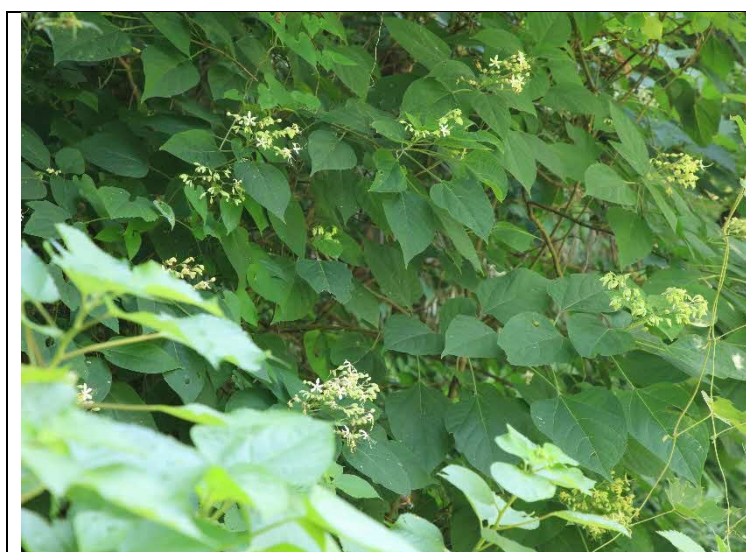
ヤブミョウガ
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）
2023年7月25日
『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.95

<コメント>
ミョウガに似た葉の構造をしています
が、ミョウガとは全く種が異な
ります。比較的暖かい所の林縁や
湿った所に生えています。



カラスウリ
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）
2023年7月25日
『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.100

<コメント>
確認されたのは蕾でしたが、夕
方になると花卉の先がレース状
になった白い花が開花したいと
思います。



クサギ
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）
2023年7月25日
『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>
シソ科の落葉低木で、葉や枝に
独特の匂いがあります。日当た
りのよい原野や林縁、崖地、河
原などで群生します。



百目の木
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）
2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

中国原産のクルミの仲間です。
写真は実で、羽に包まれた果実
が穂状に連なる様子が百目のよ
うに見えることから“百目の
木”とも呼ばれています。



ヤマノイモ
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）
2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

ジネンジョ（自然薯）、ヤマイ
モ（山芋）とも呼ばれ、とろろ
の原料となるツル性多年草で
す。



ヤマナシ
東京大学大学院理学系研究科
附属植物園（小石川植物園）
2023年7月25日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

和梨の野生種で、果実は数 cm
の大きさにしかありません。

2.2 冬の現地確認結果

春夏に確認された生きものの写真と概説を以下に整理しました。

(1) 鳥類

	<p>カルガモ 東大本郷キャンパス三四郎池 2024年1月22日</p> <p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.36、144</p> <p><コメント> カモ類の多くは冬鳥ですが、カルガモは区内で1年中見られる種類です。</p>
	<p>カワウ 根津神社 上空 2024年1月22日</p> <p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.33、38、144</p> <p><コメント> 区内を流れる神田川等を餌場に使っています。上野公園不忍池をめぐらしている集団（コロニー）があり、そこから餌場までの間を移動する際に、ビル街や住宅街の上空を通過しているのが見られます。</p>
	<p>カワセミ 東大本郷キャンパス三四郎池 2024年1月22日 重要種（VU都）</p> <p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 表紙、P.25、41、144</p> <p><コメント> 区内では小魚が獲れる比較的大きな池や神田川で見られます。写真の個体はクチバシの下側が橙色なのでメスです（オスはクチバシが黒色をしています）。</p>



キジバト
東大本郷キャンパス
2024年1月22日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.37、144

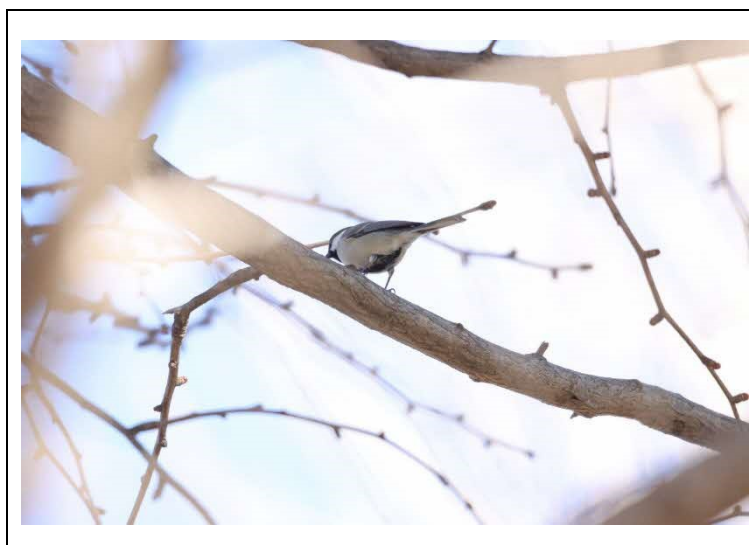
<コメント>
森林性の日本在来のハトです。
主に木の実を食べます。あまり
群れを作らず、1~2羽でいる
ことが多いです。



トビ
根津神社
2024年1月22日
重要種 (NT^都)

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.13、21

<コメント>
日本のタカでは最も普通に見ら
れる種です。かつて区部ではほ
とんど生息していませんでした
が、競合相手のカラスが都心で
少なくなったことで、区部でも
見られる機会が増えたと言われ
ています。



シジュウカラ
根津神社
2024年1月22日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.8、44、144、162

<コメント>
樹林性の小鳥です。漢字では
“四十の雀”と書きます。語源
には雀40羽分の価値がある、
たくさん群れる、鳴き声がシジ
ュウと聞こえるなど諸説ありま
す。多彩な鳴き声の特徴でもあ
るので、個人的には鳴き声説派
です。



ヒヨドリ
根津神社
2024年1月22日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.45、144、162

<コメント>

ハトよりひと回り小さいくらいの大きさの鳥で、住宅街などでも木の实がある所でよく見かけます。“ヒーヨ”と高く大きな声で鳴く鳥として覚えるのがバードウォッチングでは一般的です。桜の花が咲く時期には、桜の花の蜜を吸いに桜の木に集まっていることがあります。

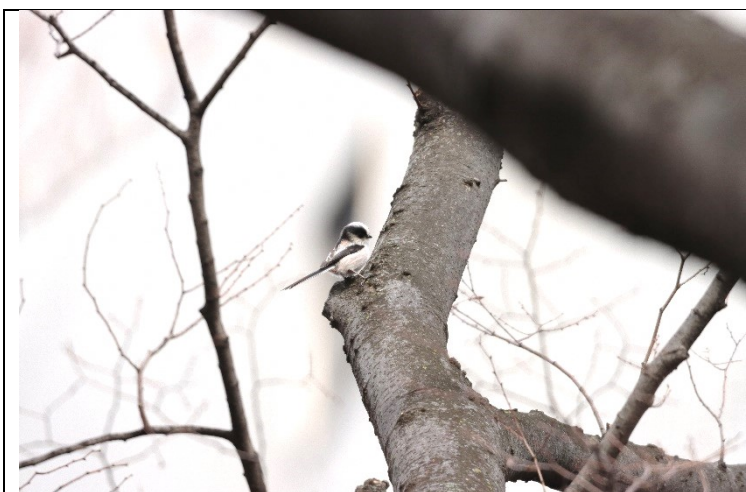


メジロ
東大本郷キャンパス
2024年1月22日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.8、47、144、153、162

<コメント>

スズメくらいの大きさの小鳥です。目の周りが白い縁取りになっているのが語源です。体は黄緑色をしているので、よくウグイスに間違えられます(本物のウグイスは褐色で、大きさも2倍くらい違います)。




エナガ
東大本郷キャンパス
2024年1月22日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.8、46、144

<コメント>

スズメくらいの大きさの小鳥です。丸っぽい体に長い尾を持つ姿を長い柄に例えて柄長と言います。だいたい群れています。

	シロハラ 根津神社 2024年1月22日
	『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.48、145
	<コメント> ハトより少し小さい鳥で、樹林地などの暗がりをお好む冬鳥です。ツグミの仲間、お腹が白いの語源です（ツグミの仲間には、お腹が橙色のアカハラという鳥もいます）。ツグミよりも警戒心が強く、驚くと大きな声を出して逃げていきます。

	ツグミ 東大本郷キャンパス 2024年1月22日
	『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.48、145、149
	<コメント> ハトより少し小さい鳥で、樹林地や草地等で見られる冬鳥です。区内では広い草地は少ないので、樹林地の方が観察機会が多い気がします。

	スズメ 根津神社 2024年1月22日
	『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.7、28、50、145
	<コメント> お馴染みの小鳥です。たいていは数羽以上の群れでいます。冬のスズメは、寒さ対策でモコモコした冬羽になっており、夏よりも少しだけ丸っぽく見えます。



ハクセキレイ
根津神社
2024年1月22日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.8、9、50、145

<コメント>
人慣れしているセキレイの仲間
です。縄張り意識が強く、たい
ていは単独か夫婦か親子で行動
しています。



ホンセイインコ
根津神社
2024年1月22日
外来種

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.142

<コメント>
かつて飼育されていたものが逃
げ出した個体の子孫です。樹洞
で繁殖するので、大きな樹木
のある神社などの周辺で見られ
ます。

(2) 爬虫類



アカミミガメ
根津神社
2024年1月22日
外来種

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.141、142

<コメント>
自然界では気温が下がる冬は冬
眠する個体が多いですが、根津
神社では冬眠しない個体が比較
的多いようです。暖冬のためな
のか、湧水（多くは汲み上げ地
下水）により水温が安定してい
るためなのかはわかりません。

(3) 魚類



コイ
根津神社
2024年1月22日
外来種(国内)

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.142、155

<コメント>

根津神社で飼育されているコイです。縁起物ではありますが、寿命が長いので管理が意外と大変です。また、多く飼いすぎると水質の濁りにもつながります。

(4) 昆虫類



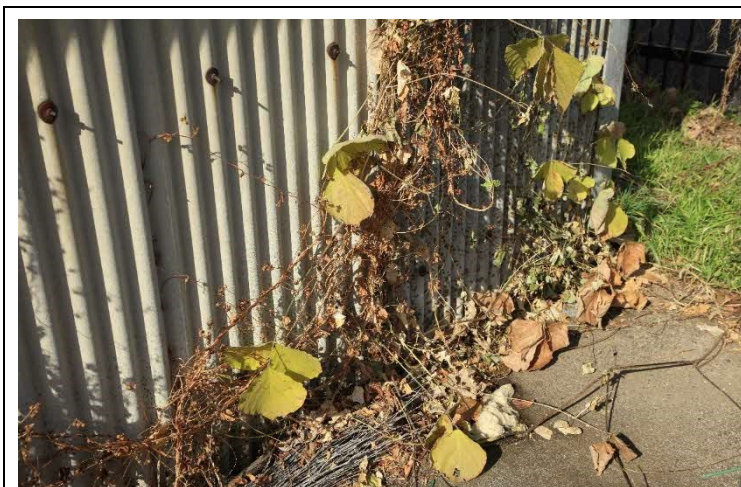
ツヤアオカメムシ
東大本郷キャンパス
2024年1月22日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
—

<コメント>

緑色で艶のあるカメムシです。冬は隙間や葉の裏側に潜って越冬していますが、観察日は暖かかったので表に出て活動していたと思われます。

(5) 維管束植物類



クズ
東大弥生キャンパス
2024年1月22日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.97、147

<コメント>

大きい葉っぱのつる性植物で、マメ科の仲間です。繁殖力旺盛で、日当たりのよい所でよく繁茂しています。くず餅やくず湯の原料です(現在では原料の多くは作物由来のでんぷんに置き換わっています)。

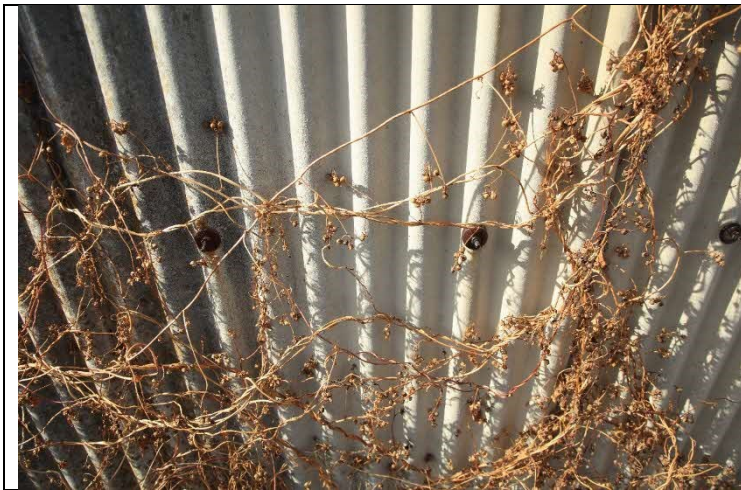


イヌホオズキ
東大弥生キャンパス
2024年1月22日

『文の京生きもの図鑑』の掲載なし

<コメント>

ナス科の雑草で、ホオズキに見た目は似ているが役に立たないことが名の由来です。果実は黒くて小さなトマトのように見えます（トマトもナス科）。



ヒルガオ科の一種
東大弥生キャンパス
2024年1月22日
外来種の可能性あり

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.134 (P.118~135 付録)

<コメント>

アサガオに似た種子の特徴からヒルガオ科の一種と思われます。




アメリカオニアザミ
東大弥生キャンパス
2024年1月22日
外来種


『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.134 (P.118~135 付録)

<コメント>

アザミの仲間は日本原産の種類もありますが、本種はヨーロッパ原産の外来種です（名前のアメリカは移入元であることに由来）。

	<p>スイセン (ニホンズイセン) 東大弥生キャンパス 2024年1月22日 植栽種</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 なし</p>
	<p><コメント> 原産地は地中海沿岸で、室町時代以前に中国を経由して日本に入ったと考えられています。本種の仲間は三倍体（染色体が3本ある）であるため種子が作れず、鱗茎で増えます。観察された個体は、過去に植えられたものの生き残りと思われる。</p>

	<p>トウネズミモチ 弥生 2024年1月22日 外来種</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.142</p>
	<p><コメント> 中国原産の常緑樹木で、在来種のネズミモチに近縁の外来種です。果実がネズミの糞に似ていることと、葉がモチノキに似ていることが名前の由来です。実は鳥に好んで食されていますが、それにより種子が色々な所に運ばれ、外来種として分布拡大が懸念される種です。</p>

	<p>サザンカ 根津神社 2024年1月22日 植栽種</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.104、148</p>
	<p><コメント> 冬に咲くツバキの仲間です。庭木として数多くの品種が作出されています。</p>



リュウキュウツツジ
東大弥生キャンパス
2024年1月22日
植栽種

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

ツツジ類は主に春～初夏に花を咲かせ、本種も春に花を咲かせますが、秋にも花が咲くことがあるようです。寒さにも強い園芸品種です。



スダジイ
東大弥生キャンパス
2024年1月22日
植栽種

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.99、148、159

<コメント>

暖地性の常緑広葉樹で、西日本の低地林ではスダジイが自然条件下では優占します。庭木や公園樹、街路樹などとしても植えられています。ドングリは長さ1～1.5cmで、帽子のようなものではなく、ドングリ全体が殻のようなもので包まれています(写真のドングリは全て殻が外れています)。



マテバシイ
東大弥生キャンパス
2024年1月22日
植栽種

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.131 (P118～135 付録)

<コメント>

暖地性の常緑広葉樹で、寺社や公園などに植えられています。ドングリは長さ2～3cmの長楕円形で、帽子のようなもの(殻斗)が付いています(写真のドングリは全て殻斗が外れています)。

3. 重要種のカテゴリー

<重要種のカテゴリー>

レッドリスト (東京都区部) ※1	レッドリスト (環境省) ※2	基本概念
絶滅 (EX)	絶滅 (EX)	既に絶滅したと考えられる種
野生絶滅 (EW)	野生絶滅 (EW)	飼育・栽培下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種
絶滅危惧ⅠA類 (CR)	絶滅危惧ⅠA類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
絶滅危惧ⅠB類 (EN)	絶滅危惧ⅠB類 (EN)	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅の危険が増大している種
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	評価するだけの情報が不足している種
—	絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの
留意種 (*)	—	現時点では準絶滅危惧のレベルではないが、相対的に数が少ない種であり、容易に個体数が減少することがあり得るため、留意が必要と考えられるもの

※1：「東京都レッドリスト（本土部）2020年版」（東京都、令和3年3月）の区部に該当する掲載種

※2：「環境省レッドリスト2020」（環境省、令和2年3月）

<重要種のカテゴリー>

もともとその地域にいなかったのに、人間の活動によって他の地域から入ってきた生物種を“外来種”と呼びます。

本報告では、下記に該当する生物種を“外来種”として選定しています。

- ①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成16年法律第78号）に基づき指定された特定外来生物、未判定外来生物
- ②「我が国の生態系に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」に掲載の生物種
- ③国立研究開発法人国立環境研究所「侵入生物データベース」に掲載の生物種